

第 53 回愛知県総合教育センター研究発表会

平成 25 年 11 月 22 日（金） 13 : 00～16 : 30

○ プログラム

【開会行事】 13 : 00～13 : 20

- 次第 1 開会のことば
- 2 所長挨拶
- 3 来賓紹介
- 4 教育研究調査事業紹介
- 5 閉会のことば

【入賞教育論文・教育史編さん事業による書籍の展示】 9 : 00～17 : 00

【教育相談特別研修報告ビデオ上映】 11 : 00～11 : 45

【研究発表・研究協議】 13 : 30～16 : 30

部会	発表題目	会場
1	教師を育てる教師の育成と研修の在り方に関する研究 (中間報告) －ミドルリーダーに求められる資質・能力とその役割 について－	第 13・14 講義室
2	高等学校における道德教育の推進に関する研究 －中学校における指導内容を踏まえた取組－	視聴覚室
3	児童生徒の情報モラルの指導法に関する調査研究 －児童生徒の実態と情報モラル指導の在り方－	第 1 情報実習室
4	不登校・不登校傾向の児童生徒に対する教育支援の在り 方に関する研究 －発達障害が考えられる児童生徒への支援を中心に－	第 10 講義室
5	特別支援学校（知的障害）における自立活動の充実に関 する研究 －「自閉症教育の 7 つのキーポイント」を活用して－	大講義室(全体会) 第 2・3・4 講義室 (分科会)
6	高等学校理科における言語活動の充実に関する研究	第 11 講義室

1 はじめに

第53回愛知県総合教育センター研究発表会を、多数の来賓及び県内から約390人の参加者を迎え、開催した。

今年度は午前には教育相談特別研修論文の内容紹介ビデオの上映を行い、午後から開会行事及び6部会の研究発表・研究協議を行った。また、図書資料室にて県の教育研究論文入賞論文の展示、本館2階フロアでは愛知県教育史の展示を行った。

以下にこれらの概要を紹介する。

2 教育相談特別研修論文の内容紹介ビデオについて

○愛知県立愛知工業高等学校 山田 麻美子 教諭

テーマ：心と体に気付かせる「体ほぐしの運動」の実践

心身ともに不安定になりやすい思春期において、敏感に自分自身の内部に目を向け、体や心の状態に気付けるようになることが重要なのではないだろうかと考えた。ストレスマネジメント教育の考え方より、リラクゼーションの方法を用いた簡単なエクササイズを行うことで、どのような気付きを得ることができるか、ストレスを軽減させることができるかを検討した。また、教科体育の「体ほぐしの運動」において実施することで、すべての生徒を対象とした、予防的・開発的な相談活動の一つになることをめざす。

○愛知県立名古屋南高等学校 佐藤 由華 教諭

テーマ：高校生の友人関係における心の動き

－質問紙調査とインタビュー調査を通して－

本研究の出発点は、「気持ちを伝え合うことが不器用であると言われている生徒の現状に対して、教師としてどんな支援が考えられるか」「生徒同士の関わりを支援すれば、不登校などの学校不適応により早い段階で対応できるのではないか」という想いである。そこで、本研究では、友人関係における心の動きを明らかにするために、高校生同士の援助行動について質問紙調査とインタビュー調査を実施した。その結果、生徒は友人と関わりたいと思いつつも相手を想うが故に触れられず、不安や葛藤を感じていることが明らかとなった。教師にとって、ネガティブな感情を肯定的に扱うこと、そして生徒が抱える悩みに直接触れず間接的にアプローチするという視点が重要であることが示唆された。

○愛知県立中川商業高等学校 坂野 広岳 教諭

テーマ：境界性パーソナリティ障害の傾向を有する生徒への支援方法の考察

境界性パーソナリティ障害とは思春期から青春期の患者が多く、衝動的な行為を繰り返す場合が多い障害である。自殺未遂を経験した者の約6割が境界性パーソナリティ障害であり、8～10%が自殺に至ると報告されている。近年研究され始めた境界性パーソナリティ特性は、「境界性パーソナリティ障害ほどの重篤さはないが、類似した認知・行動パターンを示すもの」と定義され、だれもが境界性パーソナリティ特性の行動を起

こす可能性がある」と解釈されている。教員として境界性パーソナリティ特性に着目し、生徒の支援方法について研究した。

○愛知県立小牧南高等学校 村瀬 佳子 養護教諭

テーマ：愛着理論の視点から見た健康相談

－保健室での事例を通して－

一般的に愛着が不安定な者は、対人関係をはじめとする心理的な問題のみならず、生理学的な発達の部分においても問題を生じやすくなる。また、生徒個人が保持している愛着のタイプによって、行動や情動表出に相違があり、学校生活上生じやすい問題も明らかとなる。養護教諭は生徒と愛着を形成しやすく、その職務の特質と保健室の機能を生かして健康相談を行うが、保健室の相談構造を理解した上で相談を行うことが重要となる。そのため、養護教諭の健康相談と心理臨床の領域を認識し、連携・協働する支援方法を探ることが大切である。

ビデオでは、教育相談特別研修生4名の実践発表の様子を上映した。

3 愛知県教育史の展示

愛知県教育史編さん事業で刊行・完成した「本文編」「資料編」「年表」「資料目録」全巻を展示した。

4 教育論文の展示

平成20年度から24年度までの県教育研究論文入賞者（最優秀賞及び優秀賞）の論文を展示した。

5 研究発表・研究協議

次の各研究について発表と協議を行った。なお、当センターの研究の詳しい内容については、当ウェブページ「研究紀要第103集（平成26年4月1日掲載）」を御覧ください。

◇第1部会(小中高特)

教師を育てる教師の育成と研修の在り方に関する研究（中間報告）

－ミドルリーダーに求められる資質・能力とその役割について－

【発表の概

要】

研究の2年目を迎え、「教育研究リーダー養成研修」を修了した研修員の所属する5校を研究協力校とし、研修の成果が、学校でどのように発揮されているのかを調査・分析している。そして、この結果を基に、ミドルリーダーとしての役割や在り方を明らかにし、ミドルリーダーを育成するための効果的な方策を探ることを目的として研究を進めている。5名の研究協力委員（西尾小、高浜小、大府中、豊田東高、豊川養護）によるパネルディスカッションから、ミドルリーダー2年目の成果と課題が浮かび上がり、その後、同じ立場（役職）の参加者同士がグループとなり、ミドル

リーダーの抱える課題（同僚教職員にいかにも主体性をもたせるか・共通理解をどのように図るか）の解決策について協議を行った。名古屋大学大学院柴田好章准教授からは、ミドルリーダーに求められるものとして、「教育実践上の諸問題を解決する力」「専門職としての同僚性に基づく組織を構築する力」「若手を育てつつ自らも育つ姿」「研究組織をリードする力」があり、こうした力をもつミドルリーダーがいける組織が必要となること、そして、これらが合わさることで、組織としての学校の力が高まっていくなど、多くの助言をいただいた。

◇第2部会(中高)

高等学校における道德教育の推進に関する研究 —中学校における指導内容を踏まえた取組—

【発表の概

要】

人間としての在り方生き方を十分に考え、主体的に判断し行動できる生徒の育成に資することを目的として、高等学校における道德教育の推進に関する研究の第1次報告を行った。

基調提案に続いて、名城大学人間学部宮嶋秀光教授を講師として、中学校における指導内容を踏まえた高等学校における道德教育の在り方についての講演を行った。

研究発表としては、研究会で作成した『高等学校における道德教育推進のための一問一答集』を基に高等学校で道德教育を計画・推進する際の留意点を報告した。また、道德教育指導参考資料『明日を拓く—人間としての在り方生き方を求めて—』（愛知県教育委員会発行）の国語科と家庭科の授業における活用事例を報告した。

◇第3部会(小中高特)

児童生徒の情報モラルの指導法に関する調査研究 —児童生徒の実態と情報モラル指導の在り方—

【発表の概

要】

平成24年度に実施した「児童生徒の情報機器利用の実態調査」アンケートの分析結果から明らかになった、児童生徒の情報機器やインターネットの利用状況、情報モラル意識について報告し、児童生徒の実態の把握と、実態に基づいた体系的な情報モラル指導の必要性を提案した。

また、一時間の授業を通して行う情報モラルの指導を「情報モラル授業実践」、それぞれの指導場面で情報モラルの視点を含めて行う短時間の指導を「情報モラルちょっと授業」として研究してきた情報モラルの指導法を一例として示すとともに、既存の教材を活用して手軽に実施できることを念頭に、研究協力委員が所属校で実施した授業の実践事例発表を行った。

◇第4部会(小中高特)

不登校・不登校傾向の児童生徒に対する教育支援の在り方に関する研究 —発達障害が考えられる児童生徒への支援を中心に—

【発表の概

要】

第4部会は、研究主題を「不登校・不登校傾向の児童生徒に対する教育支援の在り方に関する研

究」として、発達障害が考えられる児童生徒への支援を中心に研究を進めた。不登校児童生徒と発達障害との関連について調査した結果をまとめ、先行研究や事例研究から有効性が高いと考えられる支援策を検証した。具体的な支援のための「教育的支援項目」の提示、そして、教育的支援項目を活用した「事例シート」の開発を行い、発表した。発表後の小・中・高等学校別の分科会では、指導的立場の教諭、管理職、指導主事というさまざまな立場で、「事例シートの活用」の観点からの意見交換がなされた。各分科会からの発表では、それぞれの立場から多くの意見が出され、最後に、愛知教育大学大学院の先生方から、研究の内容、分科会の協議内容等についての指導助言をいただいた。研究発表を通して支援の在り方について深めることができた。

◇第5部会(小中高特)

特別支援学校(知的障害)における自立活動の充実に関する研究 —「自閉症教育の7つのキーポイント」を活用して—

【発表の概

要】

自閉症児を対象とした特別支援学校(知的障害)における自立活動の指導の充実を目指し、計画(Plan)―実践(Do)―評価(Check)―改善(Action)の過程での授業改善の手順を「指導計画ファイル」の作成・活用によって明確にした。「指導計画ファイル」は4種類のシートで構成され、「ICF整理シート」「7つのキーポイントアセスメントシート」による実態把握、指導目標を設定し、自立活動の内容(6区分26項目)との関連から具体的な指導内容を選定する「授業計画シート」、具体的な指導の手だてを設定し児童生徒の変容やその改善策を記載する「授業改善シート」を用いて授業改善を進める。そして、この「指導計画ファイル」作成・活用し授業実践を研究協力校である県立の特別支援学校(知的障害)で行い、発表会ではその中の4校が授業改善における有効性等について発表した。

◇第6部会(高特)

高等学校理科における言語活動の充実に関する研究

【発表の概

要】

第6部会は、高等学校学習指導要領の総則に示された言語活動の充実と、理科に示された目標の達成を目指した実践事例を報告するとともに、授業改善につながる指針を提案するために設定された部会である。「教科指導の充実に関する研究 理科 高等学校部会」において協議した科学を学ぶ意義や有用性を実感させ、思考力、判断力を育成する授業づくりに関する研究を踏まえた発表を、研究協力委員5名が行った。物理、化学、生物の各科目に関する実践を報告するとともに、日頃の授業で言語活動を充実させるための下地づくりの方法や中学校理科との効果的な接続の方法を提案するなど、平成23年度からの研究の成果を広く普及・還元することができた。

6 おわりに

研究発表・研究協議においては、部会ごとに配付資料や発表方法を工夫し、事例シートや指導計画ファイルなどの各校で活用できる資料が提供できたこと、グループ協議などの参加型の

発表形態によって、参加者が様々な情報を得られたことなどが好評であった。また、研究協力委員の実践発表は、研究について理解を深めるのに有効で、すぐ持ち帰って活用できる事例が多くあった。しかし、一部の部会では質疑応答の時間や協議の時間が不足してしまい、協議の充実を望む声があった。

今後も、現場の先生方や学校にとって指針となるよう、先導的な研究を進めるとともに、発表形態等を工夫し、充実した発表会となるよう努めていきたい。